

『拾遺和歌集』の哀傷歌考 ― 一二九四番歌を考える ―

沖 奈保子

拾遺集哀傷歌について、古今集の配列構成に習いながらも独自性を打ち出した四季観による配列、及び歌語の連関が論じられてきた<sup>1</sup>。拾遺集の四季意識は、古今集からみられる屏風歌の月次意識に倣うものであるが、田中直氏が死の主題を「季節の円環的時間構造のなかに無化・解消」すると述べられるのは、興味深い<sup>2</sup>。すでに古今集の哀傷歌の配列が、秋を中心に、秋から夏そして春へと、春夏秋冬の季節循環を逆行する配列になっていることが松田武夫氏<sup>3</sup>によつて指摘される。哀傷歌における秋歌重視の「秋は自然界の万象が死へ向かうのと同様に人もまた自然の一部として生を終える季節であるという―感覚に逆行する配列構造をとることによつて、自然の力に對抗する人間の生命力と、かつ生命の衰退から萌芽へと死の禁忌を回避する力を表しているのであろう。

古今集の哀傷巻は、大別すると他者の死に関する哀悼歌と自己の死にまつわる悲傷歌で構成され、後撰集でもほぼ同様であった。しかし、既に明らかにように、拾遺集において新たに無常、釈教歌が取り入れられる。以後釈教歌は哀傷巻の主要な主題となり、千載集では独立した部立を持つに至った。こうした過程をみると拾遺集哀傷巻は古今、後撰で確立された伝統的な型に、新たな主題および歌材を積極的に取り込み、新しい哀傷の概念を形成する始発点であったといえる。新規の歌材への注視は主に釈教歌にそがれるが、巻中で、ただ一首、流人への歌が採録されることも哀傷の系譜の中にあつて異彩を放つていよう。

としのぶが流されける時、流さるゝ人は重服を着てまかると聞きて  
母がもとより衣に結び付けて侍ける

人なしし胸の乳房をはむらにて焼く墨染の衣着よ君 (一二九四)

田中氏はこの歌の前後に服を表す「藤衣」、「墨染めの衣」の歌が配列されることから、喪服にまつわる歌群の一つとしてとらえるものの、流罪の主題について触れられていない。その他注釈書も流罪の歌が哀傷巻に入集していることを言及するものはなく、元来死にまつわる歌を入集してきた哀傷部に流罪主題が紛れ込むことへの違和、不自然さに対し、歌語の連関を指摘することによつて合理性をもたせている。しかし、詳述するまでもなく、流人の歌は都と配流地との物理的空間の乖離を意味し、再び相見える可能性を確信できない者達の別離、愛する者と引き裂かれる悲哀の思い、旅路で我が身を嘆ずる憂いが、それぞれ別、恋、羈旅巻に収められており、哀傷巻に入集するのはこれ以前にもまたこれ以後にもみられない。なぜ入集したのか。衣のバリエーションや歌材の新奇さを越えた、拾遺集哀傷巻の底流と一にする主題があるのではないか。その意味を問うことで拾遺集哀傷歌の主題に迫りたい。

二

詞書にみられる「としのぶ」についてはこれまで明らかにされてこなかった。『拾遺和歌集増抄』『八代集抄』『八代集全註』のいずれも詠者の特定にいたつておらず、小町谷照彦校注『拾遺和歌集』（新日本古典文学大系）は「不詳」とし増田繁夫著『拾遺和歌集』（和歌文学大系）でも「生没年種姓不詳」と注を付す。しかし、前半の哀悼を中心とする歌にあつて人麻呂を除けば最も古いものは紀貫之、伊勢など古今集周辺の歌人であり、同時代の歌を積極的に採録する傾向にある拾遺集の特徴と、拾遺抄の段階から入集されていることから、拾遺抄成立より前五十年をさかのぼることはないと予想される。この推測に基づいて史実に照らし合わせると、北家藤原氏による他氏排斥の

最後の事件、安和の変で配流された「としのぶ」こと「橘敏延」の名が浮か  
び上がる。橘敏延は、安和の変の主犯格として源満仲の密告によって捕らえ  
られ、土佐国に流された人物である。安和の変の概略については『日本紀略』  
に委しい。

以左大臣兼左近衛大将源高明大宰員外帥以右大臣藤原師尹為左大臣、以大納  
言同左衛門右大臣、左馬助源満仲・前武藏介藤原善時等、密告中務少輔源連・  
橘敏延（橘繁延・源連力）等謀反由、仍右大臣以下諸卿、忽以參入、被行諸  
陣三寮警固・々々等、令參議文範遣寮（密力）告文於太政大臣藤原師尹、諸卿  
禁出入、檢非違使捕進繁延・僧蓮茂等、仍參議文範・保光、兩大弁也、於左  
衛門府勘問之、無所避伏其罪、又檢非違使源満季、捕進前相模介藤原千晴・  
男久頼及隨兵等禁獄、又召内記有勅符・木契等事、禁中騷動、殆如天慶之太  
乱（安和二年三月二十五日条）

橘繁延配流土佐国（四月一日条）

藤原千春配流隱岐国、僧蓮茂配流佐渡国（四月二日条）

安和二年三月二十五日、中務少輔であった橘敏延が謀反に關つたとして、  
左兵衛大尉源連、前相模権介藤原千晴、僧蓮茂らとともに捕縛される。『日  
本紀略』では謀反を企てた人物に源連と敏延の名が同列に挙がるが、同じく  
安和の変を伝える『太神宮諸雜事記』では、「同年三月廿五日、中務少輔從五  
位下橘朝臣敏延・相模介藤原千晴・僧蓮茂等於被追捕天、敏延於被籠置於左  
衛門弓場殿、又千晴・蓮茂等於波、左右獄仁被禁固、被勘問以見之由所指申  
也」と源連の名はなく、敏延の名が記され、彼が事件の重要人物であったこ  
とを示す。敏延は捕縛後、弓場殿で勘問をうけ、翌月一日に土佐へ配流され  
た。そしてこの事件の首謀者と譏言されたのが左大臣源高明であった。『扶桑  
略記』はこの政変を次のように記す。

左大臣源朝臣高明坐事遷大宰權帥、年五十六、是依左馬助源満仲・前武藏介  
藤原善時等之密告也云々、左降之除目以前、午時、左府先以出家、同一男左  
兵衛佐忠賢、同以入道、雖然不改官符文、猶早促左遷、追使右衛門尉藤原為  
儀、迄山崎使右衛門佐大江朝臣澄景也

さてでは、橘敏延はいかなる人物であったのだろうか。敏延について『橘  
氏系図』をはじめいづれの系図類にも彼の名を見出すことができない。判断  
材料となるのは、右に挙げた資料のみである。まず明らかなことは、安和の  
変当時、敏延は中務少輔（從五位下相當）で、大輔に次ぐ役職にあり、実  
務をこなす文官であったこと。そして当時の敏延の年齢は、およそ四十歳前  
半以降。密告した源満仲が五十七歳、源連が高明の從兄弟であることから  
主犯格の敏延もおよそ四十歳後半から五十歳代であったと思われること。ま  
た、事件関係者同士の血縁関係から、敏延も『源平盛衰記』にあるように、  
高明一族との関係の深い人物であったことが判断できる。

十世紀前半の橘氏は、主に島田麻呂息子、真材、長谷麻呂、常主らの子孫  
がそれぞれ摂関家と血縁関係を結び、勢力の安泰を図っていた。また摂関家  
においても地方官を歴任している氏族はその財力の面からみても非常に魅力  
的であつたろう。その中でも真材の子孫達が橘氏の主流となり氏長者を歴任  
していた（補足系図）。中でも広相の六男八頼は延喜七年に參議となり天慶四  
年大宰府で没するまで、播磨權守、中納言を任ぜられており当時橘氏で唯一  
の參議であり氏内の実力者であつた。私は、系図にはみられない橘敏延を、  
この公頼の息子ではないかと考える。公頼には敏仲、敏通、敏貞の三人の息  
子と、系図にはみられない寛湛法師、そして少なくとも二人の女子がいた  
ことが確認できる。これら子息たちの母の素性は明らかになっていないが、  
後年公頼は「内侍」であつた女性を妻にしていたことが知られる（『貫之集』  
）。女子の一人は、藤原朝忠が通つていた女（『後撰集』九六二番歌詞書）  
で、いま一人が村上朝に典侍として出仕し、のちに安子付きの女房「宰相」  
こと橘平子（系図一）。この女性に、師輔と恋愛関係にあつたようだ（『九条  
右大臣集』）。そして、公頼の甥にあたる好古の娘等子は冷泉天皇の乳母  
となり、息子敏仲は冷泉天皇の侍読を勤めている。広相の子孫達は権勢の中  
心と結びつき氏の存続を図つていたに違いない。

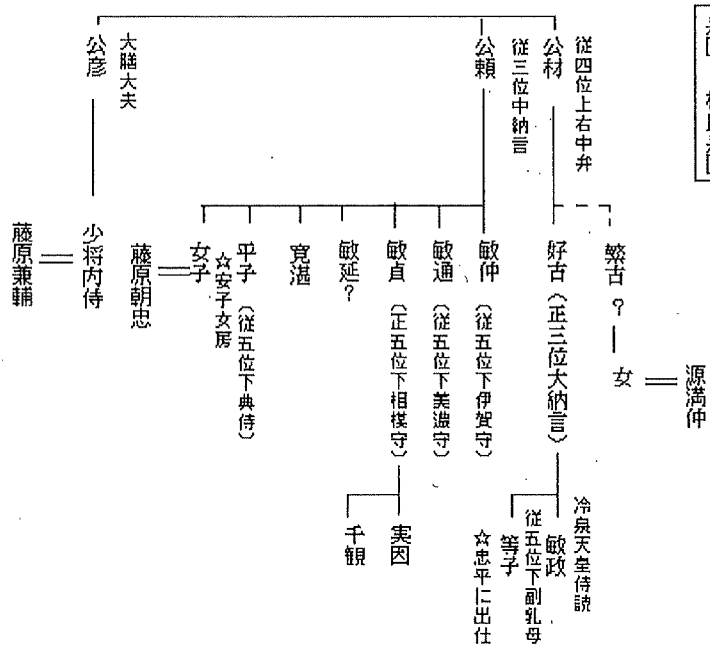
『日本紀略』とは異なり高明を中心に事件に關与した者達の名前があがっ  
ている。ここで言う「謀反」とは、高明の娘婿にあたる式部卿宮為平親王を  
皇位につけようとする動きといわれるが、事実であつたかどうかの確証はな  
い。為平親王は村上天皇と中宮安子との間に生まれ、憲平親王（後の冷泉天  
皇）の同母弟であり、父母から寵愛を受け時期東宮と目されていた。しかし、  
母安子、外祖父師輔がこの世を去るに至り状況は一変する。村上天皇は死の  
間際、源高明と密接な關係にあつた為平親王の東宮擁立を断念、その結果為  
平親王弟守平親王（後の円融天皇）が東宮の座についた。この政変は、『大鏡』  
『栄花物語』にみられるように藤原氏、主に師尹、兼家らが源高明の勢力拡  
大を警戒し、失脚をもくろんだものであつたという。

さらに、安和の変を伝える逸話に『源平盛衰記』がある。

冷泉院御位ノ時、覺御心モナク、御物狂ハシクノミ御座ケレバ、ナガラヘテ  
天下ヲ知召サン事モイカミト思食ケルニ、御弟ノ染殿式部卿宮ハ、西宮ノ左  
大臣ノ御婿ニテオハシケルヲ、「能人ニテ渡ラセ給」ト申ケレバ、中務丞橘  
敏延・僧蓮茂・多田ノ満仲・千晴ナド寄合ニ、式部卿宮ヲ取奉テ、東宮ヘ赴  
軍兵ヲ起、即位進セント、右近ノ馬場ニテ夜々談儀シケル程ニ、満仲ハ替シ  
テ、此由ヲ奏聞シケルニ依テ西宮殿ハ被流罪給ケリ。満仲返リ忠シケル事ハ、  
西宮殿ニテ敏延ト相撲ヲ取ケルニ、満仲力劣ニテ、格子ニ被撓附、顔  
ヲ打欠タリ。満仲不安思テ腰刀ヲ拔テ、敏延ヲ突ントシケル。敏延高欄ノ根  
木ヲ引放テ、「近付バシヤ打破ラントテ立跨テ有ケレバ、満仲不及力サテ  
止ヌ。時ノ人「ア、源氏ノ名折タリ」ト云ケレバ、敏延ヲ失ハントテ返忠  
シタリトイヘリ。西宮殿ハ聊モ不知召ケルヲ、敏延失シテ為二譏訴ノ次ニ「式  
部卿宮ノ御舅ナレバ」トテ、譏申ケルヲ、一条左大臣師尹殊ニ申沙汰シテ、  
西宮左大臣ヲ流シテ、其所ニナリ賛給タリケルガ、幾程モナク声ノ失ル病ヲ  
シ、一月余リ惱テ失給ニケリ。（卷十六、満仲譏西宮殿事）

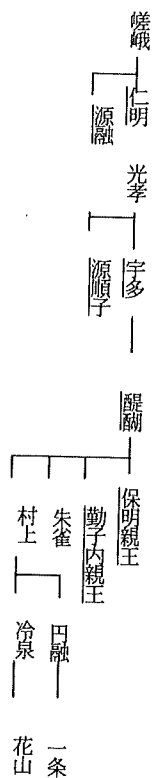
『源平盛衰記』の信憑性は決し難いが、敏延は満仲同様、高明家に出入り  
しており、満仲の敏延に対する怨嗟が、満仲の密告の直接の要因となつたと  
いう。

系図一 橘氏系図



満仲は高明の縁故者であつたが、橘氏との關係を看過できない。満仲は父  
源経基（のちに経基王）、橘繁古女との間に生まれる。満仲は、源俊の娘  
と姻戚關係をもつが、この婚姻は俊の母が橘良基の娘であり、母方の縁故か  
ら源俊一族と關係を持ち、源俊が高明の母と兄弟である縁故によって、高明  
家に出入りするようになったのであろう。安和の変の關係者は、おそらく母  
方の血縁を媒介とした集団によるものであつた（系図二）。そして、このこと  
は橘氏一門にとつて衝撃的な事件であつたことが想像できる。





しかし、それ以上に注目すべき点は、花山院の母系血縁者、および婚姻によつて成立した縁者への哀傷歌であらう。花山院の母懷子は父伊尹、同母兄弟は六人を数え、花山天皇の誕生によつて伊尹一門の繁栄は歴然としていた。しかし、その後、次男惟賢が官途半ばは二十代で死去、父伊尹も実頼の後、ようやく摂政となるものの四十九歳の若さでなくなり、そして前少将、後少将と称され、世評も拔きんでていた孝賢、義孝兄弟が父の後を追うように相次いで亡くなると、一家の支柱は失われ、伊尹一門は榮花の座を兼通ら叔父達に奪われることとなつた。その後、義懷が花山天皇を支えるもかつての隆盛はなく、その後見の不安定さが兼家の陰謀を容易なものとしたといえる。伊尹一族の早逝、特に懷子の同母兄弟たちの死は花山院にとつて大打撃だったことは間違いない。こうした実人生における悲嘆を、哀傷歌入集と関連づけることができるであらう。

## 四

では、本論に戻り、ここで改めて二九四番歌についてみていきたい。先ほど系図で示したとおり哀傷歌の多くが花山院を中心とした悲嘆であると確認したが、集で新たに付け加えられた栗田右大臣こと道兼の歌（二二八一番歌）は、花山院との関係を確認することは難しい。道兼といえは、花山天皇を欺き出家に追い込んだ張本人であり、出家後親父があつたと考えられない。そして、花山院のいわば「圈外」という点では「としのぶ」の母の詠も同様である。

「としのふ」が、安和の変で流罪となつた橘敏延をさすのならば、当時わずか二歳であつた花山院は、それと対立する藤原氏側の勢力下にあつた。安

と安和の変」（『歴史物語の史実と虚構——円融院の周辺——』桜楓社 一九八七年）

6 本文は黒田彰・松尾葦江氏校注『源平盛衰記二』（一九九四年）による。

7中務省は令制の成立当初、天皇の詔勅の起草及び覆奏を職掌としていたことから他省に比べ相手が高かったが、平安時代には太政官の指揮下におかれ中務省の地位は他省と同等になっていた。

橘氏の中で公卿になった人物の位階時の年齢を以下、参考にあげる。

庖相 從五位下（貞觀九年・三十二歳）、從五位上（貞觀十五年・三十七歳）

澄清 從五位下（寬平九年・三十七歲）、從五位上（延喜三年・四十二歲）

良殖 從五位下（仁和三年・二十四歲）、從五位上（寬平七年・三十一歲）

公賴 從五位下（昌泰二年・二十二歳）  
從五位上（延喜十二年・三十五歳）

好古從五位下（延長八年・三十八歲）、從五位上（天慶二年・四十七歲）

恒平 從五位下（天曆四年・二十四歲）  
從五位上（康保三年・四十五歲）

「たちばなのきむよりのそちのつくしへくたさる時 其このあはれのかみとしさだのあそん ままははのないしのすけにおくるものどもにくはへたる歌」(貫之集「七四」一番詞書。また「後撰集」九四二番によれば、公頼は寛湛法師母を妻にしていたことがわかる。ただし、「寛湛」なる人物は「橘氏系図」にはみられない。

「たいらけいこの内侍きよみづなるにいかがのたまはせける、内侍  
わすらるるつみばかりこそふかからめ清水さへはに「ごりしもせじ」

「橘繁古女 或説武蔵守藤原敦有女」尊卑分脈「橘氏系図」。「敦有」は異本に「能有」とあり、満仲の弟が「藤原能有女」であるから「敦有」よりも「能有」のほうが正しいかと思われる。）

1/2  
「撰関家と多田満仲」『撰関時代史の研究』吉川弘文館 一九六三年

要 1/3 「拾遺抄の特質―四季部・賀部を中心として」(山梨県立女子短期大学紀要 五号 一九七一年三月)

14 渡辺菜生子氏「拾遺集における「賀歌」の構造―賀・雑賀・神樂歌における編纂主体の意識をめぐって―」（国文 五十六号 一九八二年一月）

<sup>15</sup>今野厚子氏『拾遺集』卷五賀の再検討―賀歌に見る編纂意識―（和歌文学研究 七十七号 一九八八年十二月）

和の変において実頼、師尹、伊尹、兼家らの関与は諸説わかれるが<sup>16</sup>、結果的にみると九条家と小野宮家との権勢の差が顕在化され、実頼が「揚名閥白」と自嘲し、小野宮家が政権の頂点にありながら外戚政策の失敗から実権を握ることができず、九条家へと権力の推移がみられるちょうど分岐点となっている。この視点は、この哀傷歌が小野宮家衰微との関連を示唆する可能性を秘めるが、仮説の上の仮説であって確証を得るには再検討が必要である。しかし、少なからず花山院、小野宮家との直接の交渉を持たないこれら二首がいずれも政治的敗北を背負った一家の詠であると言えるだろう。先に拾遺集亡き子哀傷歌について、子の喪失が家の衰退へと繋がり哀傷歌が単に死者への哀悼なのではなく家系の存続を断たれたことへの悲嘆が反映されていることを指摘した<sup>17</sup>。今回拾遺集「としのぶ」母の哀傷歌の入集を探ることにより、花山院、小野宮家の悲傷を中心としながらも、拾遺集の哀傷歌が広く政治的敗退の悲しみを包括するものと指摘できるだろう。古今集、後撰集とともに死者への純然たる悲哀とその連帯感、そして自らもまた死を避けることのできない運命への諷刺が哀傷歌の核であったのが、拾遺集では権勢の隆替がめまぐるしく展開される中、哀傷は人の死に限定されない衰退に伴う根源的な悲傷を意味する。それは、十世紀後半の家格の安定までの混沌とした政治情を如実に表し、栄華から遠のいた一族の悲しみと栄枯の無常の縮図ともいふべき主題を担うものであった。

1 本船重昭氏「拾遺和歌集『哀傷』部の考察」京都府立宮津高等学校研究紀要 十一 一九七五年三月

2 「勅撰集と〈死〉の主題―『古今集』『拾遺集』の哀傷歌配列から」和歌文学研究 五十号 一九八五年四月

『古今集の構造に関する研究』 風間書房 一九七〇年

『扶桑略記』の記載による。

・山中裕氏「榮花物語・大鏡に現れた安和の変」（日本歴史 一九六二年八月）。山本信吾氏「冷泉朝における小野宮家・九条家をめぐって―安和の変の周辺―」（摂関時代史の研究 吉川弘文館 一九六五年）。山口博氏「安和の変補考」（日本歴史 一九六五年十二月 二二一―二二二号）。安西迪夫氏「歴史物語

16 山中裕氏は、安和の変の首謀者を実頼とし、協力者に師尹、伊尹の名を挙げる。これに対し山本信吉氏は伊尹、兼家の兩名が中心であったと論じられる。一方、山口博氏は、伊尹の関与を否定し、首謀者は実頼、師尹であると指摘する。安西勉次氏は、伊尹は為平親王を皇太子に擁立し、守平親王を積極的に推進する兼家と対立、実頼はその調整役を果たしたと述べられる。

17 拙稿『拾遺和歌集』の亡き子哀傷歌―藤原氏の子女の死を中心に―曰  
本女子大学大学院文学研究科紀要 十二号 二〇〇六年 掲載予定

補足系図

